なぜリゴベルタ・メンチュは大統領になれないのか

～ボリビアのモラーレス大統領と比較して～

外国語学部　スペイン語学科4年　三輪　梓

はじめに

二〇〇五年末、ラテンアメリカ史上初となる先住民出身の大統領が、南米の最貧国ボリビアで誕生した。アイマラ系先住民族のエボ・モラーレス（社会主義への運動：Movimiento al Social）が、得票率五四％という国民の圧倒的な支持を集めて、ボリビア大統領の座に就いたのだ。

一方、今年二〇〇七年のグアテマラ大統領選挙に、同じく先住民出身の女性リゴベルタ・メンチュ（中道左派のグアテマラのための出会い運動：Encuentro por Guatemala）が立候補した。幼い頃から先住民人権運動家として活躍した彼女は、一九九七年にその功績を讃えられノーベル平和賞を受賞した。国内外でも知名度が非常に高く、また人望が厚かったため、世界中のメディアがラテンアメリカに二人目の先住民出身大統領が誕生することを期待した。しかし同年九月、リゴベルタは得票率わずか三％という結果で落選した。

なぜ同じ先住民族でありながら、リゴベルタはモラーレスのように大統領になることができなかったのだろうか。グアテマラもボリビアも、国の人口の過半数を先住民が占める貧しい国であり、二人を取り巻く状況は一見非常によく似ている。しかし、二人がこれまで行ってきた活動や主張に注目してみると、そこには非常に大きな違いがあることがわかる。それは、リゴベルタが世界中の先住民族の権利を主張することに専ら従事してきたのに対し、モラーレスはボリビアの貧困層全体の要望により深く従事してきたことである。ここでは、リゴベルタとモラーレスがこれまでどのような活動を行い、どのような人々の支持を集めてきたのかを検証し、二人の間にある違いを具体的に明らかにしていく。そして、先住民族の割合が五割以上を占める国で、なぜリゴベルタがもっと多くの支持を集めることができなかったのかを考える。

1　先住民族女性として活躍するリゴベルタ

中米グアテマラでは、全人口の約六〇％～八〇％をマヤ系先住民族が占めるが、その彼らのほとんどが貧困層に属している。リゴベルタ・メンチュは、グアテマラのそんな貧しいマヤ系先住民キチェ族の家に生まれ、幼少の頃より家計を少しでも助けるために季節労働者として、日給わずか一～二ドルのコーヒーや綿花の大農場で働いた。ここで彼女は、過酷で劣悪な労働条件の下、多くの仲間が栄養失調や農薬散布に苦しみ死に絶えていくのを目の当たりにする。そして次第にグアテマラ内戦が激化していく中、リゴベルタは先住民族の政治的・社会的権利の確立の重要性に目覚めていくようになる。この章では、グアテマラの貧しい先住民族の一人であったリゴベルタが、なぜ世界の舞台で先住民族の人権や文化の擁護運動に従事していくようになったのかを、リゴベルタのノーベル平和賞の受賞と共に追い、彼女がどのような主張を行っているのかを見ていく。

（1）グアテマラ内戦と先住民の組織化

グアテマラ政府とゲリラによる戦争は、一九九六年の平和条約の調印まで三六年にもわたり続いた。この期間に約二五万人の国民が犠牲になったといわれ、またそのほとんどが先住民族であった。

単にマヤ系先住民族と言ってもそれは単一民族ではない。グアテマラには公用語のスペイン語のほかに、二一のマヤ系先住民族の言語が存在する。それぞれの民族が独自の共同体の文化やアイデンティティーを持っているため、先住民同士の間でも意思の疎通を図るのは難しい。こうしたことが長い間、グアテマラの先住民が個々の民族の枠を超えて団結することを妨げていた。

リゴベルタの父親のビセンテ・メンチュは、彼ら一家が属する先住民共同体の代表者であった。利発なリゴベルタは、わずか一〇歳の頃からそんな父親を手伝い、またカトリック教会の社会活動にも参加するようになる。こうした活動を通じて、幼いながらも自分たち先住民族がどれほど理不尽な状況に置かれているのか、それはなぜなのかを理解していき、今、自分たちに必要なのは団結することであると悟るようになっていった。そして独学でスペイン語を学び、家族と離れたリゴベルタは、グアテマラ各地の先住民族の共同体を一つ一つ尋ね歩き、虐げられながらもずっと沈黙を守ってきた先住民の意識を少しずつ変えていく。こうして七〇年代に入り、初の先住民主導による農民統一委員会CUC（労働条件改善の要求、地主や軍による人権侵害への抗議等を行う）が誕生するも、民衆運動の活発化が進むほど軍事政権による弾圧は厳しさを増し、グアテマラ各地で軍による虐殺や拷問が次々と行われていった。リゴベルタは父親をCUCの反政府運動の戦いのさなかで亡くし、母親と弟を軍によるすさまじい拷問の末に殺された。彼女自身も一九八〇年には、遂にメキシコへの亡命を余儀なくされてしまう。

（2）国際舞台での活躍とノーベル平和賞受賞

メキシコへと亡命したリゴベルタは、グアテマラで起きている人権侵害の現状を伝えるためにラテンアメリカ各地を訪ね回った。そうした中で彼女は、抑圧や差別に苦しむ多くの先住民と出会い、先住民の置かれている劣悪な状況や差別はグアテマラだけが抱える問題ではなく、国境を越えた、実に普遍的な問題であるということに次第に気付かされていく。グアテマラ国内を奔走したように、リゴベルタはアメリカ大陸を南から北まで訪れ、先住民族の人権尊重、文化の回復、そして歴史の再評価を求める活動を展開し、少数民族同士が団結しあうことの重要性を説いていった。

リゴベルタのこうした活動は次第に評価されるようになり、コロンブスのアメリカ大陸到着のちょうど五〇〇年後にあたる一九九二年に、リゴベルタはノーベル平和賞を受賞する。祖国からの亡命を余儀なくされてから一二年目にして得た栄光であった。受賞にあたり、リゴベル

タは次のように述べている。

「私は感激をもってノーベル平和賞を受ける特典を与えられたことを誇りに思います。この賞を、わたし個人への名誉としてではなく、平和と人権のため、生活の権利のために闘う先住民族が獲得した成果のひとつと考えます。この五百年間の歳月にわたって分断され根無し草にされ、さらに大虐殺、抑圧そして差別を受けてきた先住民族の〈歴史〉が獲得したものだと考えます。」（『先住民族女性リゴベルタ・メンチュウの挑戦』九頁）

こうして世界で名を知られる存在となったリゴベルタは、翌一九九三年の国際先住民年にはその親善大使に任命され、各国から相次いで招かるようになり、それこそ世界中を駆け巡るようになった。彼女の活動の舞台はラテンアメリカという枠を飛びこし、より大きな世界の舞台に移ったといえるだろう。

リゴベルタの主張の中で注目すべきところは、世界各国の先住民族の団結を呼びかけてはいるが、それが先住民文化の統合を促しているのではないということだ。つまり彼女は、多種多様な先住民族それぞれが持つ、固有の文化や歴史を尊重することに重点を置いているといえる。これはより伝統的な先住民族の共同体の中で育ったリゴベルタの、自らの文化に対する大きな誇りに関係しているのだろう。しかし、彼女は今、祖国から離れ、先住民族を否定する側の言葉（スペイン語）を話している。世界に先住民族の人権を、固有の文化を認めてもらうために必要なこととはいえ、自らの文化を深く敬愛する彼女にとって、これは大きなジレンマとなっているのではないだろうか。

（3）二〇〇七年グアテマラ大統領選挙への出馬

こうしてリゴベルタは、内なるアイデンティティーの葛藤と戦いながらも、世界で先住民運動の第一人者という地位を確立し、二〇〇七年のグアテマラ大統領選挙に臨んだが、得票率はわずか三%という結果に終わった。

何度も言うようだが、グアテマラの人口の約半数は先住民で構成されている。グアテマラ国内で彼女を英雄視する人も多い。それにもかかわらず、リゴベルタはわずか数パーセントの賛同者しか得ることができなかった。

リゴベルタはグローバルに活動し、世界中に散らばる先住民族や少数民族の賛同を得てきた。しかし、彼女を支持する人々は、各国では少数派である。それはグアテマラでも同様なはずである。リゴベルタは歴史の中で失われてきた、あるいはグローバル社会の中で失われつつある先住民文化の擁護を主張してきた。しかし、全ての先住民がそれを望むとは限らない。今現代において、先住民伝統の文化を維持しながら生活している先住民族がどれだけいるだろうか。

2 ボリビア社会運動と先住民エボ・モラーレスの台頭

南米二位という豊富な天然ガス資源を保有しながら、ボリビアは南米一の最貧国である。民族構成は先住民が五五%、混血が三二%、白人が一三%となっており、ラテンアメリカの中でもグアテマラ同様、とりわけ先住民の割合が高いことがわかる。また、人口の過半数以上が貧困層に属しており、そのほとんどを先住民と混血が占め、逆に国の富の半分以上をわずかな富裕層が所有している。

では、なぜボリビアはこのような状態になってしまったのだろうか。原因の一つにボリビア

済が挙げられる。ボリビアでは少数派の白人や富裕層が政治の実権を長い間握ってきた。生活水準の極めて高い、こうした少数派によって構成された政府が、米国やＩＭＦの方針に従った政策を取り続けてきた結果、富裕層はますます豊かになり、貧困層の生活はますます圧迫した。その結果、貧困にあえぐ民衆は、自分達を無視して政治を進める政府に対し、大規模な反政府運動を行うようになった。

そんな中、コカ栽培農家の組合の指導者となって名を揚げていたモラーレスは、二〇〇〇年の水戦争や二〇〇三年と二〇〇五年のガス戦争を機に、ボリビア社会運動の中心人物として活躍していくこととなる。この章ではコカ栽培農家の運動、水戦争、ガス戦争と呼ばれる新自由主義経済の波紋が引き起こしたボリビアの一連の社会運動を紹介し、そしてこうした出来事を通じて、モラーレスがどのようにして、いかに多くの国民の信頼や期待を集め、大統領の座に就くに至ったのかを見ていく。

（1）モラーレスとコカ栽培農家の運動

一九五九年一〇月、モラーレスはアイマラ先住民族の貧しい農家に生まれた。中学を卒業後は兵役に就き、その後様々な職を経てコチャバンバでコカの栽培農家となった。ここで彼はコカ栽培農家の反政府運動に関わるようになり、次第に指導者として頭角を現していくのである。

a 密輸とコカ栽培に支えられる農民の生活

では、なぜモラーレスは非合法とされるコカ栽培をするようになったのだろうか。実はこうしたことは彼に限らない。ボリビアでは経済危機により職を失った労働者の多くがコカ栽培へと流れた。コカ栽培でなら食べていけるからである。というのも、コカインの原料となるコカには大きな需要があるからだ。

元々、南米の先住民の文化にはコカの葉を噛む習慣があった。空腹を和らげ疲れを癒すコカの葉は、薬や宗教的儀式の道具として重宝されてきた。しかし、こうした目的のために使われるコカの葉は、今、ボリビアで栽培されているコカの葉のほんの一部である。栽培されるコカの葉の大部分は、コカインを製造するためにボリビア国外へと密輸されている（図一）。非合法に取引されるコカの葉の価格は、合法的に取引されるコカの葉の価格の三倍にも跳ね上がる。皮肉にも、これがボリビアの貧しいコカ栽培農家や職を失った労働者たちの生活を支えている。

b 政府と米国によるコカ撲滅政策と農民運動

南米で生産されるコカのほとんどが米国に密輸されている。（図二）のコカインの地域別・国別摘発割合のグラフを見ると、米国でどれほどのコカインが出回っているかがわかる。この現状を打破するため、米国はボリビア政府にボリビア国内のコカ栽培を減らすことを条件に、経済的な援助を行うことを約束した。こうしてコカ減反政策に乗り出したボリビア政府は、コカ農家にコカ以外の作物を栽培するよう促し、合法的なコカ栽培地域を大幅に減らして、非合法に栽培するコカ農家を取り締まった。

しかし、コカ以外の作物を育てても、国際市場では大農園で大量に収穫された安価な他国の作物には到底敵わない。そして貧しいボリビアで他に職などは無い。こうしてコカ栽培者たちは立ち上がった。自分達がコカ栽培者となるのはなぜか。他の職では食べていけず、米国でコカインの需要があるからだ。つまりボリビア政府の貧困対策が不十分で、米国が米国内のコカイン密輸業者をきちんと取り締まらないためである、と彼らは主張した。コカの需要が無く、他に仕事があればコカ栽培などはしない、と。

事実、ボリビアで生産されるコカの葉がコカインとなるのは、コロンビアまたは米国国内においてである。コカイン精製技術を持たないボリビアはコカイン生産国とはいえない。こうして、モラーレスはコカ栽培農家として反政府運動を展開し、多くのコカ栽培者の絶大なる支持を得る。そしてこれを基盤に一九九七年には下院議員当選を果たし、政治家としても活動する。

（2）コチャバンバの水戦争から得る教訓

国際通貨基金（ＩＭＦ）と世界銀行の指針に従い、米国の推し進める新自由主義経済を取り入れたボリビア政府は、一九九九年一一月、水道公社（ＳＥＭＡＰＡ）の民間化を行った。すると海外の企業がぞくぞくと進出し、ボリビアの水道事業は利益目的の外国企業の手に渡ることとなった。コチャバンバでは米国多国籍企業の「ベクテル」が買収を行い、系列の水道会社のアグアス・デル・トゥナリ（Aguas del Tunari）を立ち上げた。そして二〇〇〇年一月、このアグアス・デル・トゥナリ社は水道料金を平均の二倍から三倍の価格に引き上げた。それは貧困世帯の割合が高いコチャバンバでは、家庭の所得の四分の一に値するほどであった。

二〇〇〇年四月、住民グループと市民団体によって結成された「水と生活を守る同盟（コールディナドーラ）」は、コチャバンバ市内を封鎖し、四日間にわたる抗議活動を行った。これは警官との衝突によって多数の死者を出す騒ぎへと発展し、アグアス・デル・トゥナリ社は撤退へと追い込まれ、水道事業は再びＳＥＭＡＰＡの手に戻された。

水戦争にモラーレスは直接には関わっていない。けれど結果的に、生命に直接関わる水を外国企業の手に委ねさせてしまったことで、新自由主義経済やそれを受け入れているボリビア政府に対する貧困層の不信感は、ますます大きなものになったと言える。こうして、モラーレスはコカ栽培農家の支持に加えて、新自由主義経済に苦しむより多くの貧困層の支持を得ていった。

また、人間の営みに欠かせない水を巡るこうした問題は、決してボリビアのみに当てはまることでは無く、世界中で起こりうることである。モラーレスは二〇〇三年三月に京都で開催された第三回世界水フォーラムに出席し、「世界の貧しい先住民の生活を守るためにも、水をＩＭＦや企業の資産にしてはならない」と述べ、他国企業に水管理を委ねることの危険性を説いている。

（3）ガス戦争からモラーレス新政権の誕生まで

a　反政府運動の前に倒れた政府

水道事業同様、ボリビア政府はガス・石油部門の民営化も進め、外国からの投資を積極的に受け入れた。結果、ボリビアのガス埋蔵量の約七〇％は、ブラジルやスペインなどの外資系企業が所有することとなり、ボリビアに入る収入は、使用量として支払われる収益のわずか一八％であった。国民に富を与えるはずの自国の豊富な天然資源は、ボリビア国民の生活を助けるものとは全くなっていなかった。

二〇〇三年の九月から一〇月、および二〇〇五年の五月から六月に、こうした天然ガスを巡る問題をきっかけに、市民団体、先住民、農民、運輸・鉱山・教員労働組合、野党勢力、そして地方自治体など、様々な人々の不満と要求が一斉に噴出し、大規模な政治的また社会的混乱を招く事態が起こった。これを総じてガス戦争と呼ぶ。

二〇〇三年の混乱は天然ガスの輸出用パイプライン建設を巡って始まり、治安当局との衝突で六〇人以上の市民が死亡した。当時のサンチェス・デ・ロサーダ大統領の辞任によりこの混乱は沈静化へ向かったが、二年後の二〇〇五年、新・炭化水素法（注一）が公布されたことをきっかけに、反政府運動は再び過熱する。民衆は天然ガス資源の国有化の他に、総選挙の前倒しや制憲議会の招集による先住民の権利拡大、新たな経済モデルの策定等を要求し、ボリビア九県のうち八県で幹線道路の封鎖を行った。そのため諸都市は深刻な燃料・食料不足に陥った。事態の更なる悪化を恐れたカルロス・メサ大統領は辞任を発表し、エドゥアルド・ロドリーゲス最高裁長官が暫定大統領として就任した。そして六ヶ月後の同年一二月に民衆の要求した総選挙が実施され、モラーレスが大統領に当選するのである。

b　ガス戦争でのモラーレス

さて、前述したように、モラーレスは多くのボリビア国民に望まれる形で大統領に就任したわけであるが、実際、ガス戦争で彼は一体どんな役割を果たしたのだろうか。

反米・反グローバル主義者であるモラーレスは、南米最貧国のボリビアを救うためには、天然ガス事業を国有化して、その利益を国民のために使うべきだと主張し、こうした事業が外国企業の手にあることを強く批判した。ガス戦争では、モラーレスや彼の率いる社会主義への運動（ＭＡＳ）は、幹線道路の封鎖やデモ運動の民衆への指導を積極的に行い、彼らは一連の反政府運動の中心になって活躍した。

こうしてガス戦争を通じてモラーレスは、新たに都市労働者や農民、鉱山労働者、市民など、実に幅広い層の支持を集めることに成功したと言えるだろう。

（4）モラーレスを大統領へと導いたもの

新自由主義経済を取り入れてからというもの、ボリビア政府はＩＭＦや米国の方針に盲目的に従い、コカ栽培農家の撲滅運動や水道会社・ガス会社の民営化を行ってきたが、その度に貧しい民衆は生活に苦しみ、結果として反政府運動を起こすに至った。貧困層の暮らしをますます圧迫する新自由主義経済政策を推し進める政府に、民衆はもう愛想を尽かし、自分たちの側に立って考える、貧困層の側に立って考える指導者を求めたのである。それが貧富の差を生む新自由主義経済を否定し、天然ガスの国有化を選挙公約に掲げる、先住民出身のモラーレスであった。

モラーレスは、コカ栽培農家の運動でコカ栽培に関わる先住民、農民、職を失った労働者の支持をゆるぎないものにした。そして彼が、その他の先住民や都市労働者などの支持を得るきっかけとなったのが、水戦争とガス戦争である。こうしてモラーレスは大多数の貧困層の支持を集め、大統領選挙に勝利するに至った。

3　リゴベルタとモラーレスの違い

グアテマラもボリビアも全人口の過半数を占めるのは先住民である。しかし今、私たちがイメージするような伝統的な暮らしを続けている人々は、その中でどれくらいいるだろうか。恐らくごく少数の人々に限られてしまうであろう。大部分の先住民は農民や労働者として働いている。スペイン語を話す者も増えている。先住民が社会の底辺で虐げられていることに今も昔も変わりはないが、彼らの生活は大きく変化している。そして、確かにグアテマラでもボリビアでも、貧困層に属する人々の大半は先住民であるが、先住民でない人々も貧困層にはいる。つまり、リゴベルタのように先住民文化の擁護や、人権尊重を基盤とする主張だけでは、一国の大統領選挙において、貧困層はおろか大多数の先住民の支持も得ることができない。

モラーレスは確かに先住民である。彼にはリゴベルタのような主張もある。しかし彼は、先住民だから先住民比率の高い国で大統領に当選したわけでは決してない。コカ戦争や水戦争、ガス戦争などのような一連の社会運動を通して、民族や職業にかかわらず、国の過半数を占める貧困層を味方につけたからである。そこがリゴベルタとモラーレスの大きな違いであった。

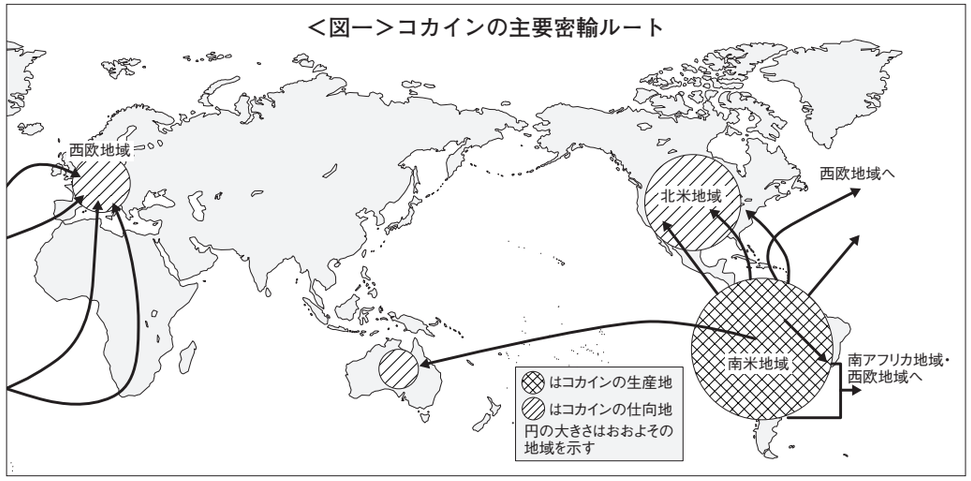
先住民比率の高い国で選挙に勝利するのに大切なのは、先住民の支持を集めることでは決してなく、そうした枠を超えて貧困層の支持を集めることであると言えるだろう。

（注一）天然ガス・石油関連の採掘権一八％および税金三二％の計五〇％を外国企業に課す、などといった内容を盛り込んでいる。

※リゴベルタ・メンチュ（Rigoberta Menchu）の名前の表記について

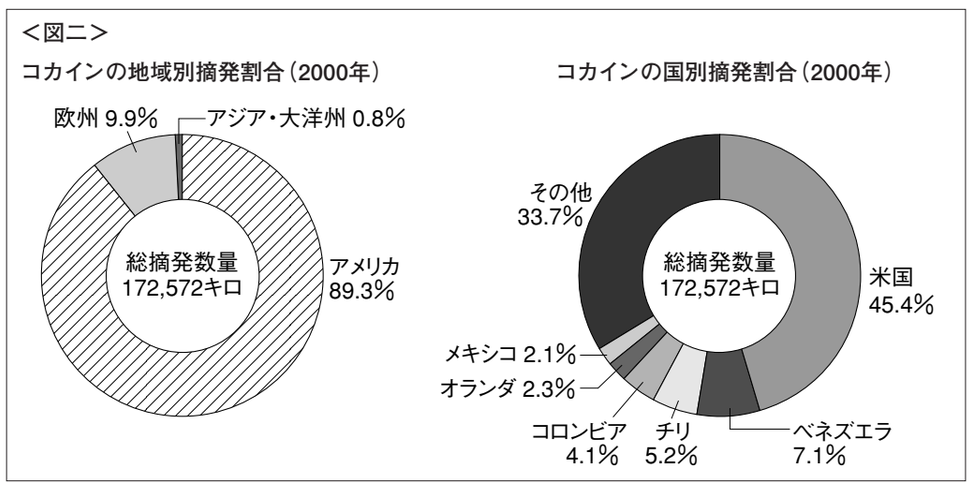
日本では「リゴベルタ・メンチュウ」のように、最後に「ウ」を付けて表記されることが多いが、本論文ではより本来の発音に近づけるため、「リゴベルタ・メンチュ」と表記した。

＜図一＞コカインの主要密輸ルート



出典：ホームページ「世界における密輸動向等(3)コカイン」

＜図ニ＞



〈参考文献〉

・エリザベス・ブルゴス著、高橋早代訳 『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』新潮社（一九八七）

・岩倉洋子，上村英明，狐崎知己，新川志保子『先住民族女性リゴベルタ・メンチュウの挑戦』 岩波ブックレット （一九九四）

・『ラテンアメリカレポート』 アジア経済研究所 Vol.23 No.2 （二〇〇六）

・「ボリビア年表」
http://www10.plala.or.jp/shosuzki/chronology/andes/bolivia2.htm

・「ボリビア–Wikipedia」
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9C%E3%83%AA%E3%83%93%E3%82%A2

・「ボリビアガス紛争–Wikipedia」
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9C%E3%83%AA%E3%83%93%E3%82%A2%E3%82%AC%E3%82%B9%E7%B4%9B%E4%BA%89

・「中南米を読む」
http://www.chunambei.co.jp/editorial/061505.html

・「世界における密輸動向等(3)コカイン」
http://www.customs.go.jp/mizugiwa/mitsuyu/report2000/KZ2001G3.HTM

・「世界・ボリビア:コチャバンバ市の水戦争から6年」
http://www.news.janjan.jp/world/0611/0611129570/1.php